大場・養沢にも円墳か

三島

GW三島が整備復活へ　昔は山の神 火伏せ神も

寺跡で墳丘上に石祠

赤色立体地図で発見 第2弾　三島市大場の県立三島南高東側、伊豆縦貫自動車道の大場・函南インターチェンジ（IC）近くの丘陵先端にも、赤色立体地図で確認すると円墳らしきマウンド（土を盛り高くした場所）があるのが分かった。マウンド上には江戸時代の年号が刻まれた石祠が安置され、近年は地元でも忘れられていたが、かつて火伏せの神である秋葉神社や、山の神として大場地区の信仰を集めてきた歴史がある。今、民間団体が復活に向けて活動中だ。（文、写真　特別編集委員・森野宏尚）

円墳と見られるマウンドの上に安置される江戸中期の年号が刻まれる石祠。「神奈養沢寺の跡で、近年まで秋葉神社や山の神として信仰を集めたという

石祠のある丘陵は函南町上沢との境、大場の養沢という場所だ。寺岡製作所函南工場の真裏で、数年前、同所を調べた当初は上沢の新興住宅地という三島市郷土資料館の長の寺田光一郎さん（63）から調査に入った。なだらかな斜面に畑が広がり、丘陵には比較的簡単に行けた。

石祠は「石祠は大場養沢の山の神講に関係するもの」と記憶しているが、赤色立体地図では直径10メートル強の円墳のようにも映る。「以前、撮った写真を見ると石祠の前に散在する石材は、古墳の石室によく見られ気になる。この古墳規模だと、丘陵周囲も含め群集して造られる傾向があり」。

一帯の土地所有者を探し出して話を聞きたいとの思いで、周辺一帯で何人かに取材したがどり着けなかった。そんな中で、近くに住む定時制高校教諭の岡田圭三さん（60）から貴重な情報を得た。「丘陵下の畑は妻の実家の所有で、石祠にも行ったことがあるが、ちょっと気味悪さを感じていた」。加えて「グラウンドワーク三島のメンバーが数年前から一帯を整備している」。

整備中ということは土地所有者も分かってるはずと、すぐNPO法人グラウンドワーク三島の三島市芝本町事務局に事務理事・渡辺豊博さん（76）を訪ねた。伊豆縦貫道やIC建設地の一帯は、大場地区の水田の湧水源域で貴重な生物も多くすみ、コンクリート製の水路になるところだったが、渡辺さんらの尽力で池や自然の水辺環境を整備・保護することができたという。

その一連の活動の中で、近くの丘陵にある石祠の存在を知り、渡辺さんは大場出身の中村正孝さん（東京医科歯科大＝元教授）から、次のような話を聞いたそうだ。

「祠の辺りは光明寺（伊豆箱根鉄道・大場駅近く）や檀家である個人の所有地。同寺にある秋葉神社の本社でもあり、江戸時代の地誌『豆州志稿』に『廃養寿寺　村ノ東に地名尚存ス、往年、当時確認した古老の話を信ずるのみとなった」、

大場町内会が2000（平成12）年に発行した『大場誌』によれば、丘陵に石祠、その下が円墳と見られる一帯は養沢と呼ばれ、非常に興味深い場所だ。ここに昔（江戸時代以前）、養沢寺という寺があったとされ、丘陵先には伝説の土妻・赤王入道の館が存在したともいわれている。

大場誌には「付近の山腹から石棺（白色）の石が数個発見されたが、いずれも（今は）跡形もなく」とある。

石祠は秋葉神社や山の神ともいわれ、石祠内の台座に「寛政四子（一月十八日）」、檀信徒とみられる「彦八、清左エ門、九左エ門」などの名前も刻まれる。「寛政四」は西暦で1792年12月31日である。

丘陵先端部の上沢側の断崖下は寺岡製作所の裏で、ここに数基の横穴墓が見られる。大場側の養沢隙間地は小字が「大守台」で、大場誌は赤王入道との関わりを指摘し、「明日射すら日輝く白つじ黄金千杖二千杯」の歌が伝わり、天狗、明治　その前山、伊豆縦貫道

函南町上沢側の斜面。大きな石や段状の盛り上がりも見え、渡辺豊博さんは「前方後円墳のよう」という

方面に小山の丸山が今は一つあるが、昔（削られる前）は三つあり「三ツ山」と呼ばれた。ここから土器や焼米、什器が出土、北西側の畑からは建造物の土台らしき礎石も発見され、一帯が戦国時代の土妻・赤王入道の館跡と地元に伝わる。

複雑な道側の水田の間を入り、山に上がるのが参道ルート。近くに大場地区の水田を潤す水源があり、山裾から水がこんこんと湧く。渡辺さんは「調査のため浜松市の秋葉神社総本山を訪ねた際、火伏せの神様は水の神様と表裏一体。近くに水源はないか」と聞かれ、この地に秋葉神社が立地する訳がかかった」と話した。

田んぼの中の道が参道で、正面の丘陵に石祠と石祠がある。左は湧水の水路。丘陵上に祖霊方面へ古道が通る

石祠の中の右に刻まれた江戸時代中期の「寛政四子」などの年号や浦左エ門、反八ら檀信徒の名前